

23:26 彼らは、イエスを引いて行く途中、いなかから出て来たシモンというクレネ人をつかまえ、この人に十字架を負わせてイエスのうしろから運ばせた。23:27 大ぜいの民衆やイエスのことを嘆き悲しむ女たちの群れが、イエスのあとについて行った。23:28 しかしイエスは、女たちのほうに向いて、こう言われた。「エルサレムの娘たち。わたしのことで泣いてはいけない。むしろ自分自身と、自分の子どもたちのことのために泣きなさい。23:29 なぜなら人々が、『不妊の女、子を産んだことのない胎、飲ませたことのない乳房は、幸いだ』と言う日が来るのですから。23:30 そのとき、人々は山に向かって、『われわれの上に倒れかかってくれ』と言い、丘に向かって、『われわれをおおってくれ』と言い始めます。23:31 彼らが生木にこのようなことをするのなら、枯れ木には、いったい、何が起こるでしょう。」23:32 ほかにもふたりの犯罪人が、イエスとともに死刑にされるために、引かれて行った。23:33 「どくろ」と呼ばれている所に来ると、そこで彼らは、イエスと犯罪人とを十字架につけた。犯罪人のひとは右に、ひとは左に。23:34 そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」彼らは、くじを引いて、イエスの着物を分けた。23:35 民衆はそばに立ってながめていた。指導者たちもあざ笑って言った。「あれは他人を救った。もし、神のキリストで、選ばれた者なら、自分を救ってみろ。」23:36 兵士たちもイエスをあざけり、そばに寄って来て、酸いぶどう酒を差し出し、23:37 「ユダヤ人の王なら、自分を救え」と言った。23:38 「これはユダヤ人の王」と書いた札もイエスの頭上に掲げてあった。23:39 十字架にかけられていた犯罪人のひとはイエスに悪口を言い、「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え」と言った。23:40 ところが、もうひとりのほうが答えて、彼をたしなめて言った。「おまえは神をも恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。23:41 われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」23:42 そして言った。「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときには、私を思い出してください。」23:43 イエスは、彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」23:44 そのときすでに十二時ごろになっていたが、全地が暗くなって、三時まで続いた。23:45 太陽は光を失っていた。また、神殿の幕は真つ二つに裂けた。23:46 イエスは大声で叫んで、言われた。「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」こう言って、息を引き取られた。23:47 この出来事を見た百人隊長は、神をほめたたえ、「ほんとうに、この人は正しい方であった」と言った。23:48 また、この光景を見に集まっていた群衆もみな、こういういろいろの出来事を見たので、胸をたたいて悲しみながら帰った。23:49 しかし、イエスの知人たちと、ガリラヤからイエスについて来ていた女たちとはみな、遠く離れて立ち、これらのことを見ていた。

現代人が神を信じられない大きな要因に、私たちが住む世の中や宗教に対する基本的な疑問に宗教が答えてくれないと感じていることが挙げられると思います。宗教について耳にする幻想のような世界と現実の世界にまったくつながりを感じられないのです。その結果、現実に対する宗教の教えは非現実的で、人が心に抱える悩みや問題には役に立たないと思われています。

こうなった責任の一端は教会にあると私は考えます。教会は、キリスト教のメッセージを、人々の文化やニーズに則したかたちで伝える方法を忘れてしまっているのかもしれませんが。しかし一方で、キリスト教が本当に人の悩みや問題に触れているかどうかをじっくり考えることを現代人がしないのも事実です。

今朝私たちは、聖書の物語の中でかなめとなる場面に注目し、この個所が、神やキリスト教に対して人が持つ疑問に思慮深く十分な答えを与えてくれることを学んでいきたいと思えます。

今朝の聖書個所は、イエスの死についてルカが残した記録です。この福音書のクライマックスと言えるできごとです。今日は、私たちが心の奥底に抱く疑問に答えてくれる十字架の3つの側面に注目します。これを、十字架の不当性、十字架の皮肉、そして、十字架の力と呼ぶことにしましょう。

1. 十字架の不当性 (32-34 節、40-41 節、47 節)

- a. ここに挙げた聖書個所に繰り返されるのは、イエスの無実です。「この方は、悪いことは何もしなかったのだ。」
- b. イエスの死に至るまでの話を read することがあれば、ある明らかな事実気づくでしょう。それは、あまりにもひどい話であるということです。イエスは、身近な人に裏切られ、真実を語って正義をもたらすべき人々の手によって不当な仕打ちを受けました。宗教家として誠実の模範を示すべき立場であるパリサイ人や、正義をもたらすべき立場であったローマ帝国の総督ピラトは、自分たちの都合で、無実の人を有罪としました。彼らは貪欲や憎しみ、そして恐れに屈し、正しいことをしませんでした。
 - i. この点にもう少し注目するために、この数週間の学びを思い出してください。イエスはこれまで、何をしてこられたでしょう。
 1. 病人を癒す。
 2. 傷ついた人々を立ち直らせる。
 3. 希望と真理のみことばを人々に教える。
 4. 他の個所では、貧しい人々に食事を与え、社会の誤りに異議を唱える。
 - ii. キリスト教を必死に疑う人でも、「この方は、悪いことは何もしなかったのだ。」という点では同意せざるを得ないでしょう。むしろイエスは、「すべて良いことをなされた」のです。栄誉や敬意を受けて当然のはずが、ここではひどく不当な仕打ちにさらされています。殴られ、あざけられて、犯罪人たちと十字架につけられました。
- c. このような不当な扱いがあったと知るなら、クリスチャンであるなしに関わらず、怒りや悲しみが起こるはず。イエスは、彼を告発する人々によって、公正で正当な扱いをすることを拒まれました。それが不正そのものではないでしょうか。公正で正当なことが奪い取られることです。
 - i. 私たちも共感できる部分があるでしょう。私たちがこれまでの人生で事の大小は違っても、不当だと感じたことがあると思います。自分に落ち度がなくとも、公正さを欠く人のせいで苦しめられた経験があるのではないのでしょうか。そのような目に遭ったのは、あなた自身だったかもしれないし、家族や友人にそういうことが起こったのかもしれない。
 1. あなたの功績を誰かが自分のお手柄にしてしまった。
 2. 誰かが自分の都合のために人間関係をうまく利用した。
 3. 性別、人種、家柄などを理由に差別されている人がいる。
 - ii. ここに、世間で起こる不正の例をすべて挙げようとするなら、他のことを話す時間はなくなってしまおうでしょう。その影響は国民レベルでも個人レベルでもあります。独裁や貧困、民族浄化など世界規模の不正もあれば、私たちが日常で経験する偏見や葛藤もあります。私たちはこの世で生きる限り、これらのことから逃れられません。いずれ私たちの身に降りかかることなのです。
- d. そうなると、不正に満ちたこんな世の中に良い神などいるのだろうかという疑問を抱きます。
 - i. 人は自由と公正を求めます。正義はすべての人に与えられた基本的権利だと考えます。しかし、その正反対のことが頻りに世間で起こっているのを目にします。
 - ii. そして、人はある結論に達します。神などいるかどうかわからない、もしいたとしても人間の事など考えていないか、それほど力のない神であるか、世の中の悪を許す悪い神であるという結論です。
- e. しかし、十字架について考えるなら、聖書の神についてそのような判断を下すことはできないと思います。キリスト教のメッセージで、神は不正に満ちた世界に歩み寄られます。神は、当時もっとも貧しかった地域で人となられました。軍の厳しい圧政のもとでしいたげられた少数部族になられたのです。
 - i. 神はそんな世界に歩み寄られただけではありません。私たちが生きる不正の世界に入ってこられたのです。そして、そのもっともひどい仕打ちを受けられました。暴力、あざけり、偽証に基づいた裁き、そして処刑です。皆さんもご存じのとおり、十字架刑は極悪犯罪者のみに課せられる刑でした。このような不正

に私たちが直面する可能性はありますが、そうならないことを願います。イエスは、この世で起こり得るもっともひどい経験をなさいました。

- ii. ですから、神が私たちの受ける不正や不当な扱いをご存じないとか気にかけておられないとかと言うことはできません。もしそうなら、この世に入ってこられる理由がありません。
- iii. 神が天国からこの世の不正をご覧になることと、実際にこちらに来て人類とともにそれを体験なさることとはまったく別次元の話です。
 1. 神が苦しみを経験したことがなければ、どうやって私たちの悩みや問題を本当の意味で気にかけることができるでしょう。神は力のあるお方だから、有力者にしか共感できないだろうと思う人がいるのも理解できます。しかし、十字架においてはそうではありません。十字架において、宇宙の主であるお方はしいたげられた人々とともにあることを選ばれました。
 2. 十字架に目を向けながら、神が私たちの住む病んだ世界のことを心にかけておられないということではできません。神は、深く心にかけておられたので、この世に来て、私たちとともにその苦しみを分かち合ってくださいました。皆さんが、そのことに気づいてくださることを願います。

十字架は、神が私たちとともに不正を分かち合うことを選んでくださったことを示します。こうして、十字架が不正についての人類の疑問に答えてくれることが分かりました。しかし、この話にはもうひとつ重大なことがあります。その重大な事柄は、イエスという人に注目し、この人の正体を明かします。

2. 十字架の皮肉 (35-39 節)

- a. イエスは死に際に、四方からあざけられました。ここに大きな皮肉が込められています。ここで繰り返し登場するあざけりの内容は「もしキリストなら、自分を救ってみろ。」というものでした。
 - i. ここに登場する皮肉を理解するには、聖書が語るキリストの人生がどのようなものかに目を向ける必要があります。
 1. では、キリストについて記された有名なみことばをイザヤ書 53 章から読みましょう。53 章全体がここで私たちの考えている内容に関連しますが、今日は 7-12 節を読みます。

53:7 彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。 53:8 しいたげと、さばきによって、彼は取り去られた。彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ、生ける者の地から絶たれたことを。 53:9 彼の墓は悪者どもとともに設けられ、彼は富む者とともに葬られた。彼は暴虐を行わず、その口に欺きはなかったが。 53:10 しかし、彼を砕いて、痛めることは【主】のみこころであった。もし彼が、自分のいのちを罪過のためのいけにえとするなら、彼は末長く、子孫を見ることができ、【主】のみこころは彼によって成し遂げられる。 53:11 彼は、自分のいのちの激しい苦しみのあとを見て、満足する。わたしの正しいしもべは、その知識によって多くの人を義とし、彼らの咎を彼がになう。 53:12 それゆえ、わたしは、多くの人々を彼に分け与え、彼は強者たちを分捕り物としてわかちとる。彼が自分のいのちを死に明け渡し、そむいた人たちとともに数えられたからである。彼は多くの人の罪を負い、そむいた人たちのためにとりなしをする。

こうして見ると、イエスに起こったことの多くは、このみことばどおりのようです。

2. しいたげと、さばきによって、彼は取り去られた。(8 節)

3. 彼は暴虐を行わず、その口に欺きはなかった。(9 節)
 4. 多くの人を義とし、彼らの咎を彼がになう。(11 節)
 5. そむいた人たちとともに数えられた(12 節)
- ii. それでも人々はイエスに「キリストなら、そのことを証明しろ」と迫りました。もし目の前にイザヤ書 53 章が開かれていたら、彼らは同じことが言えたでしょうか。
- b. イエスに向けられた最後のあざけりは、イエスが主張したとおり神の選ばれたお方だったことを証明しろという要求でした。彼らが見落としたのは、イエスの死に関する詳細がトラーの中であらかじめ語られていたことです。イエスの死が、イエスがキリストであることを証明します。「イエスは本当に主張どおりの人物だったのか」という疑問の答えを求めているなら、十字架に目を向ける必要があります。
- c. イエスの周囲にいた人々は、神のキリストがどんなふうであるべきかということについてある思い込みをしていました。この思い込みのせいで、十字架上で死んだ人がキリストであるという事実を見過ごしてしまったのです。
- i. 彼らは、「すごい奇跡をここで見せてくれない限り、あなたの主張は明らかにうそだ」というようなことを言いました。彼らの条件を満たすかたちでイエスが神であることを証明するよう要求したわけです。
- d. これは、多くの現代人も同じです。「神が今ここに来て、奇跡を起こしてくれたら信じる」と言います。自分たちが信じる条件を使って神を試すのです。
- i. あるとき、地元の学校で生徒たちと苦しみについて話したことがあります。ある男子生徒は、神が存在することを人々に証明するためにその場に姿を現さないのはおかしいと強く言いました。力強い神が存在することを示す一番良い方法というものを彼なりに考えていたのです。
 - ii. こうした議論には多くの問題があります。しかし、今朝はひとつのポイントに焦点を当てたいと思います。
 - iii. この場面に登場する人々は、イエスが力を示すことを要求しました。しかし、私たちが尊敬を抱く力の示し方とは、力のある人物が力を使わない道を選ぶことではないでしょうか。自分を救うことはできるけれども、他の人たちを救うために、自分を救わないことを選ぶのです。自らを犠牲にすることを選ぶのです。力を使おうと思えば簡単にそうできるのにそうしないのは、非常に強さの要ることです。
 1. 以前、私は英国のジャパン・ソサエティー（日本協会）というところで働いていました。当時、第二次世界大戦中の広島原爆投下に関する経験談を研究する仕事が与えられました。ぞっとするような多くの話を読む中で、あるヨーロッパ人の人々の話に感動しました。この話のヨーロッパ人の多くはクリスチャンで、日本人の人たちを助けるために、惨状と化したこの町にとどまることを決心しました。彼らは、つてをたどって安全な場所に逃れることもできたのに、大きな犠牲を払ってそこにとどまることを選びました。空爆を受けた際、彼らは日本人と同じ恐怖を体験しました。彼らは日本人の隣人たちのことを心から気にかけていたので、その恐怖を共有する選択をしたのです。このような行動には計り知れない勇気が要ります。この感動的な話から、神がイエスにおいて私たちのために同じことをしてくださったことを知ることができます。神は、私たちの恐怖や苦しみをともに経験することを選んでくださったのです。
- e. これまで話してきたことを考慮しても、イエスがご自身を救おうとしなかったことは、イエスの置かれた状況を考えるととても奇妙に思えます。
- i. もしあなたがやってもいないことをやると責められたら、なんとかして疑いを晴らそうと頑張りませんか。
 1. 私は高校生のときに、一度だけ放課後に残されたことがあります。それは、母が私の生徒手帳を確認したあとに、私のかばんに戻すのを忘れたときでした。学校に着いてすぐ、自分のせいではないことをみんなに説明しました。わざわざ母から学校に電話をかけて説明してもらいました。くだらない例で申し訳ないですが、なぜ私はそれほど熱心に自分の疑い

を晴らそうとしたのでしょう。それは、誰でも公平さを望むからです。それは自然なことです。私たちは真実を求めます。

- ii. しかし、ここでイエスは自分の疑いを晴らそうとはなさいません。むしろ、犯罪者や罪人とされることを選ばれました。ご自分の罪ではないのに、罪をかぶることを選ばれたのです。
 - 1. イエスは、いつでも天の御使いの軍勢に命じて、助けに来させることができるお方です。けれども、呪われ傷ついた人類を救うために、そのひとりとなることを選ばれたのです。それは、キリストについての預言が語るとおりです。
 - 2. あざけられても十字架にとどまることが、皮肉にも、イエスが神の選ばれたキリストであることを目の開かれた人たちに証明していました。ただ、そのようなかたちでご自身の正体を明かされるとは誰も想像していませんでした。
- f. 十字架で死んだこの人物に関する歴史の記録は、神の選ばれたキリストの話であることを、皆さんに気づいていただきたいと思います。この人は、神の御子です。十字架は、イエスという人について私たちが持つ疑問に答えてくれます。少なくとも、答えの糸口を与えてくれるはずです。

十字架は、私たちが受ける不正を分かち合ってください。神について教えてください。しかし、このすばらしい教えだけでなく、さらに、十字架が成し遂げるということについても教えてください。こうして、人間が抱えるもうひとつの深刻な問題を解決してくれます。それは、神と人間の断絶です。今日、最後のポイントです。

3. 十字架の力 (42-46 節)

- a. この箇所を理解するために、ふたつの重要ポイントがあります。42-43 節と 45 節です。42-43 節では、死にゆく犯罪者とイエスの会話が記されています。そして 45 節には、神殿の幕がふたつに裂けたことが記されています。
 - i. イエスが死ぬという悲劇の只中で、希望に満ちた驚くべき事柄を垣間見ることができます。
- b. 41 節で、イエスの横で十字架にかかっていた犯罪者は、自分が有罪で、当然の刑罰を受けていると認めます。それなのに、イエスからは「あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」という言葉を受けました。
 - i. 罪のある人がどうやって天国に行けるのでしょうか。この人についていくつかの点に注目する必要があります。
 - 1. **彼は、自分の置かれた状況から救ってもらうのではなく、罪からの救いを求めました。**ひとりめの犯罪者は、十字架から降ろしてもらうことを望みました。それは当然のことです。私たちもその立場なら、同じことを求めるでしょう。しかし、もうひとり、イエスに自分のことを思い出してくださいと願います。彼は、自分に何より必要なのは、十字架から降ろしてもらって苦痛から解放されることではなく、罪を赦されることだと自覚していました。この箇所から、罪がどれほど深刻なものであるか、教えられます。十字架刑に処せられることよりも深刻なのです。
 - 2. 次に、この男性は、イエスがどういうお方なのかをはっきり理解していました。周囲の人々がイエスに「あなたが本当にユダヤの王なら」と言ってあざけていたときに、この犯罪者はイエスが神であることを確信していたようです。
 - 3. それだけでなく、彼は、イエスが無実であることを認めています。彼自身は有罪なので刑罰を受けるのは当然だが、イエスは無実なので、罰せられるべきではないと信じているようです。
 - ii. この人がこのように言ったのは、ただ切羽詰まっていたからでしょうか。そうかもしれませんが、この犯罪者が示した信仰と信頼の質が、イエスを動かしたと言えます。イエスは、苦痛な死の過程の中で、驚くほどの安心をこの人にお与えになりました。

1. 「あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」イエスは、天国で神のご臨在の中にいることを指してこうおっしゃいました。犯罪者が罪を認めてイエスにあわれみを請ったことで天国に行けるのです。イエスはそのあわれみを与えてくださいました。
- iii. イエスは十字架上で人間の手によるひどく不当な扱いを受けておられました。けれども同時に、私たちの罪に対する神の正しい裁きに私たちの身代わりとなって向き合っておられました。神に背を向けた私たちに対する神の義なる御怒りが、イエスの上に注がれていたのです。イエスはこうすることを選ばれました。あの犯罪者のような人が、パラダイスに入ることを許されるためです。
- c. これがひとつめです。次のポイントもひとつめのポイントと密接に関わっています。44-45 節をご覧ください。ここには、いくつかの出来事が立て続けに記されています。今日注目したいのは、神殿の幕が裂けたことです。
 - i. この 4 週間、私は罪の問題をメッセージで取り上げてきました。罪は、どの話にも共通する黒幕です。イエスと出会ったすべての人が直面する究極の問題です。
 1. 罪の問題は、聖書全体に登場します。「なぜ聖書は罪にそれほど執着するのか」と思ったことがありますか。
 2. そこにはいくつかの理由がありますが、十字架で焦点を当てられるふたつのことがあります。それは、神に対する罪は反逆行為なので罰せられなければならないこと、そして罪によって人は神から引き離されることです。
 - a. ここで幕が裂けたことはとくに重要です。というのも、創造主との愛に満ちた交わりの輪に入ることは、私たちが造られた目的だからです。しかし、罪が入ったことでその目的はすべてふいになりました。
 - ii. 神殿の分厚い幕は、至聖所の前にありました。至聖所とは、神のご臨在がとどまっているとされた場所です。この幕は、神の御前によそ者であるという私たちの立場を常に思い出させるものでした。その幕の向こうに行くことは決してできません。私たちをお造りになった神とひとつになることはできないのです。そのためには、いけにえをささげる必要があります、幕の向こうに行けるのも、限られた一時だけです。
 1. しかしついに、十字架の出来事があって、この分厚い幕が上から下へと裂けました。もはや用済みの過去のものとなったのです。
 2. 大学の教授でなくても、これが象徴することを理解できます。イエスは死んで、私たちのために天国への扉を開いてくださいました。イエスの死が、私たちの罪の代価を支払ってくれたので、私たちは神の子として神のご臨在に出られるようになりました。
 - iii. 神の御子は、捨てられました。それは、私たちが神との交わりに迎え入れられるためです。このつながりだけが、私たちをあるべき姿にしてくれます。このつながりを持つために、私たちは造られたのですから。皆さんがそのことを感じ取ってくださるよう私は祈ります。けれども、今朝はまだそのことを感じられなくても、人が心の奥底に秘めるたましいの問題に対する答えはこれなのです。神に通じる道は、イエス・キリストの死によって開かれました。十字架にかかった犯罪者はそのことを悟りました。私たちはどうでしょう。このことを真剣に受け止めていますか。